

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo.33（2015年12月号）◆

暖かな冬となった年末、皆さまにおかれましては、いかがお過ごしでしょうか。年明けて2016年1月30日には百回記念研究会を予定しております。詳細は後日お知らせ致しますが、ご予約の上、研究会にお運び頂ければと思います。なお、『Intelligence』ご愛読の会員の皆さまには、ニュースレターとともに、「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> および会員向けブログをあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】会員向けブログでのエッセイは、すでに六回目まで掲載しておりますが、お楽しみ頂いていますでしょうか。第五回目は鈴木貴宇先生が、「ベルリンにて、戦後70年を考える」、第六回目は吉田則昭先生が、「『緒方竹虎とCIA』その後」をご執筆になられています。どちらもこぼれ話という以上の読み応えのある内容です。

また、このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なさりたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

【第98回20世紀メディア研究会】（11月28日（土）午後2時30分～18時）

・河キョンジン(東京大学大学院情報学環)：「戦後日本におけるパブリック・リレーションズの移植と変容」は、占領期日本で占領軍が設立したPROの下で、どのようにPRという概念や行為が日本の中に浸透していったのかを、行政PRと経済PR、および電通をはじめとするメディアと広告業界という三つの側面から明らかにして下さいました。

・松岡昌和(日本学術振興会特別研究員)：「従軍画家が描いた東南アジアの女性像」は、戦争中に日本軍が占領したシンガポールをはじめとする東南アジアに関して、松下紀久雄をはじめとする画家や漫画家がそれらの土地の女性達をどのように描いたのかを、オリエンタリズムとジェンダー表象という観点から分析して話して下さいました。

・小野耕世(東京工芸大学芸術学部客員教授)：「日本軍政下インドネシアの子ども新聞と小野佐世男の連載マンガ」は、陸軍報道班の軍属としてジャワに従軍した画家・小野佐世男が、日本軍政下で朝日新聞社系統のジャワ新聞社から発行された子ども向けの新聞『カナジャワシンブン』に描いた連載漫画を、新たな資料として発掘し、紹介して下さいました。

※ なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

●次回の20世紀メディア研究会は、2016年1月30日(土)に、百回記念20世紀メディア研究会を予定しております。山本武利先生、加藤哲郎先生、川崎賢子先生、土屋礼子が報告の予定です。詳細は改めてご案内致します。また、研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【気になる新著紹介】

春名幹男『仮面の日米同盟－米外交機密文書が明かす真実』(文春選書)は、「アメリカは頼れる同盟国か？」という問いに対する答えを機密文書から検証した書。「裏切りの沖縄返還」や「尖閣諸島におけるアメリカの本音」の章は必読。小谷賢『インテリジェンスの世界史－第二次世界大戦からスノーデン事件まで』(岩波書店)は、ファイブ・アイズによる通信傍受を軸としたインテリジェンス現代史。

【コラム：2015年回顧－占領期のアイコンというべき人々の逝去】

原節子、水木しげる、野坂昭如、鶴見俊輔…ふりかえれば、今年は占領期を語るに欠かせない人々が次々と他界された。戦後七十年を区切りとして、一つの時代の語り部たちがそろって去りゆくその足音に合掌し耳を澄ませながら、占領期の研究を進めてきた私たちの任務は何かと改めて思いをめぐらせずにはられない。戦前、戦中、戦後と連なる時の流れの

中で、占領期はひとときわ失意と希望、闇と矛盾に満ちた疾風怒濤の変革の時代であったと言えよう。しかし、その時代をどこから眺めるかによって、その姿はまるで違って見える。20世紀メディア研究会では、プランゲ文庫に収められた新聞雑誌などの資料を足場に、多くの研究者や関心を持つ市井の人々がさまざまな声を聞き取ろうとしてきた。政治家や官僚といった権力者たち、作家やジャーナリストなどの知識人だけでなく、サラリーマンや農民や労働者など肩書きもない無名の庶民たちの多様な声が、プランゲ文庫の中のガリ版刷りの冊子や稚拙なイラストや印刷ミスが多い印刷物からは汲み取れる。検閲や用紙やイデオロギーなどの制限を受けつつも、人々が何を語り伝えようとしたのか。生きた語り部たちが去りゆく今後は、ますます残された文字や資料からその声を読み取ることが大事になるだろう。語り継がれてゆくエピソードとともに、これからも庶民たちが残した時代の息吹を真摯に聞き取っていきたいと思う。 [12月26日付 文責：土屋礼子]